

宇治市教育振興基本計画についての生涯学習活動の推進現場からの意見

これからの時代のキーワード

国が、地方行政が、会社が、周りが「あれしてくれない」「これしてくれない」と愚痴を言って、自ら行動しようとしなない人のことを「くれない族」と言う。作曲家・阿久悠さんの遺した言葉に「何もしなければ道は拓けない。何もしなければ石になってしまう。」がある。

これからの時代を力強く生き抜くために目指したいキーワードを2つ挙げる。

一つは、『自立』…自分で考え、自分で判断して、自分で行動し、結果は受け入れて自分で責任をとる。このような気概が求められる。

10年ほど前に東福寺管長が「高校1年生の若者を夏休み10日間寺に預かって禅の体験をさせた結果、10日間の貧乏体験で「ものの有難味」「親の有難味」が分かり、貧乏体験が人間を成長させた」と京都新聞に書いておられた。豊かな社会環境が自分の欲求を抑えきれない状況を生み出している側面がある。「ないものねだり」より、「あるもの」の有難さを感じて、物や心が満たされない状況を我慢して乗り越えられるよう、自分を律することが自立の前提であり、このようなハングリー精神を培っておくことは将来の大きなバネになると思う。私の小学2年の時、実家は農家で余り裕福でなく5人兄弟、ハーモニカが無性に欲して両親に買って欲しいと何度も言ったが買ってもらえなかった。両親が京都の南座に観劇に行く際、ここぞと思ってハーモニカをお土産にと言った。まさか買ってくれると思わなかった。明るる朝、枕元にハーモニカが置いてあった。その時の感激は今も記憶に。これが音楽を続けている原点。

もう一つは、『共生』…自分本位の考え方から共生への考え方へ。自然との共生:地球環境にやさしく。そして、社会との共生:思いやりの心を大切にして相手の立場を考え多様性を認め、周り

の人々や世界の人々と共生する努力から「絆」が生まれる。バランス感覚と全体最適の視点で行動すること。

今、社会人として何が求められているか？

パラダイムシフトの時代。皆が「当然と思っていた枠組み」が根底から覆る現象が社会、政治、経済、生活など様々な領域で起こっている。今は変わらないことがリスクの時代とも。例えば、全く新しい価値を創造した新興企業の出現によって市場環境が変化しているのに、既存の優良企業は過去の成功体験が足かせとなって追いつめられ、新興市場への参入に失敗し、最終的には市場を奪われ衰退して行く事例が多々ある。過去の成功条件は環境が変われば悪循環に変わりうる。環境変化に即応できない企業は消えていく。会社はいつまでも存続するとは限らない。そのようにならないためにも、柔軟な発想力と変革の志の持続が重要となっている。

こうした時代に求められるのは、指示待ち人間ではない。①自分でまず「あるべき姿」を考えて現実とのギャップから課題を見つけ出し、その課題解決に向けた仕掛けを自ら考え、自ら進んで行動する人。②「どうしたらできるか」を考える努力をせずに「できない理由を考える」人はダメ。難しそうな仕事を与えられた時、自分の存在感をアピールし認めてもらふチャンスと思って、まず現状でできることから着手し、ある程度「かたち」ができてきたところで人や予算を増やせと要求して仕事を前に動かそうとする人。③事細かなことを気にせず全体最適の視点でよりよい結果を目指して協力関係をうまく構築していける人。④熱意を持ち続けて、諦めず粘りのある人。

学校の成績と社会での成績はイコールでない。これからの社会人は、企業であれ、役所であれ、卒業した後も、以前にもまして学ぶ姿勢を持ち続け、自己のスキルアップを図ることが求められる。前向きな思考と行動の継続が人生に良いチャンスをもたらす。

シニアの知恵、経験を学校教育にもっと活かせば良いのに！

主としてシニアになってからも心豊かに充実した人生を過ごしている元気人を発掘し、その人の生き様、体験談を聴くことによって、市民がより心豊かな生活を過ごし、ひいては地域社会で積極的に活動する切っ掛けを得ることを目指した「おしゃべりサロン」を生涯学習ボランティア活動として、これまで11年間に渡って123回(約6,600名が参加)続けてきた経験から感じること。

教育振興基本計画21ページの『理数教育の充実』の中に「実験・観察を重視した理科教育を進めるとともに、論理的思考を伸ばす理数教育の充実を図る。地域人材を活用し、児童生徒が自然や科学技術に親しむ機会の拡充を図る」と記載されているが、ぴったりの人材が宇治市におられる。

第116回おしゃべりサロで「私と 油絵と蝶と～ちょっと風変わりな家庭教育」で発表頂いた南陵町在住の平賀壮太氏。平賀氏の話によると、昆虫との出会いは6年生。昆虫網を自作して、オートバイで父親が野山に連れて来てくれて昆虫採集をしていたが、当時は生活史が不明であった。「オオゴマシジミ」(蝶)の幼虫の観察記録を中学3年の時に研究誌に発表して大人の研究者が驚き絶賛した逸話があり、南魚のファールと言われている。その貴重な体験が科学者になる糸口。将来の職業について迷われた時、父親に相談されたところ、画家になるならピカソのような独創的な大芸術家になれと言われ、科学者の道を選ばれた。分子生物学者になり、熊本大学と京都大学で研究を続けられ、大腸菌の染色体などの研究で世界的に注目される業績を挙げられた。定年退職後は「油絵」と「昆虫の研究」の子供時代の二つの趣味を再開して楽しんでおられる。特に、「アゲハチョウのサナギの色はどのようにして決まるのか？」という中学時代からの謎の解明に自宅で再挑戦。光沢紙とサンドペーパーで実験し、サナギになる場所の表面に対する触覚刺激の蓄積で、表面が滑らかなら緑、粗ければ褐色になる、という色決定要因を解明された経緯と発想の凄さに感銘を受けた。子供の時の夢を76才の今も持ち続けておられ、ユー

モアのある生涯現役の人。・・・この方の生き様と、身近な物で工夫した理科実験で学術的に大きな成果を発見された体験談を子どもに聴かせたら、理科好きの生徒が増えると推察する。

第117回おしゃべりサロン「私と 教育、そして百名山」で発表頂いた京都府立亀岡・久御山・桃山の三高校の校長を歴任された日野純一氏から、戦後の教育史を振り返りながら、社会に警鐘を鳴らす数々の話を伺った。子供たちを取り巻く教育環境が大きく変わった。近年、教育制度の諸改革が行われたが、教師は聖職から専門職になり、道徳教育未実施から道徳心崩壊、週5日制「ゆとり教育」(教科書で教える量が3分の2に)の結果が学力低下・競争力低下・個の力の減退、社会変化への対応力不足等の問題、そして核家族化による家庭教育の低下など、子供教育の様々な問題点を指摘された。学校長時代、高校生に対して、最先端技術見学、自然放射線量測定による巨椋池の境界線調査、サイエンス・イングリッシュ・キャンプ実施、英国ケンブリッジ大学やオーストラリアでの研修、日独交流(コンサート)、日中韓交流(シンポジウム)、西安修学旅行で現地大学生との勉強・交流など、主として理系人材とグローバル人材の育成に向けた教育実践をして来られた。そして、2010年には中国日本友好協会の招きにより京都と和歌山の高校生100人の団長として上海市、山東省、北京市を訪問し、学校交流やホームステイの他、万里の長城、故宫博物院、孔子廟等の歴史遺跡や上海万博を見て、参加した高校生は現地の高校生と親睦を深めるとともに、悠久の歴史と経済発展著しい中国への理解を深められた。最後にメッセージとして、社会総がかりで教育再生に向け、①核家族から大家族主義へ、②家訓の復活(自己のアイデンティティ確立)、③会津藩訓「ならぬものは、ならぬものです」は自明の理で、形から入り内発的精神の醸成、④企業の三方よし論、⑤善なる言葉(努力、根性、愛など)の復活、⑥利益・権利競争社会より人道主義の競争社会へ、など熱く語られた。話の中で「生きる力より、『生き抜く力』が大切」の言葉が印象的だった。

教育振興基本計画23ページの「豊かな心をはぐくむ教育の推進」と記載されているが、この観点からも子どもたちに聴かせてやりたい、素晴らしい生き様を実践しているシニアがいる。

第90回おしゃべりサロン「私と 地球四周ひとり旅～世界の秘境をまわって 今 あなたに伝えたい」で発表頂いた久楽迎古氏は、長年経営してきた服飾関係の事業を50歳の時に廃業。生きる方向が定まらず、悶々とした日々を過ごす中で、試練は大きな飛躍のチャンスと発想転換。それ以来、自分探しの世界の旅に出て16年間、世界35カ国に及ぶ地域をひとり旅された。現地ですぐに入手した地図と案内所で聞いた危険情報をもって心と身体で感じるという旅スタイル。印象に残る美しい自然や野生動物等を写真撮影して、その画像を特殊な和紙に顔料を使って焼き付けるアート“夢絵”を創作して夢絵作家に。つまり実業家から芸術家に変身された。感動的な写真を撮影された時の様子や秘境の旅の体験談、経験に裏打ちされた前向きな生き方語録、例えば『かたつむり 登らば登れ 富士の山』や、古希を迎えても『心は7掛け(49歳)、身体は8掛け』の心意気に刺戟を受ける点が多々あった。

4年前に神戸市立だいち小学校(「キャリア教育」文部科学大臣賞受賞校(全国 15 校の一つ))の5年生を対象に講演された同氏の話に多くの生徒が感動したとの感想が寄せられたと聞いている。その時の演題「美しい地球をあなたに伝えたい～山はみどり、野に花、人にはこころ」

- 冒険は遊び心からの出発
- 一步踏み出す一実践<始めなければなんにも始まらない>
- あの峠を登ったらなにかがある・・・しかし
- さまざまな生き物との出会い 一緒に考えよう
- この解放感からもはや引き返せない・・・病みつき
- 楽しいなあ。うれしいなあ。幸せだなあ。ありがたいなあ・・・心の持ち方
- みんな好きなものを見つけよう・・・夢の実現に向けて 一緒に考えよう
- 夢を持とう、夢は作りだすもの 一緒に考えよう
- 終わりに一メッセージ 一緒に考えよう

第82回おしゃべりサロン「私と 地域ボランティア・子育て教室～ポラン教室26年の歩み」で発表頂いた松井敏子氏は、教師歴37年の発表者が同僚(元教師)と2人で教育現場での体験を活かしたい夢をもって、乳幼児の子育ての悩みや教育相談に応じる、地域に開かれた「ポラン教室」を1987年7月に広野町尖山の緑に囲まれた地に開設された。乳幼児の言葉の発達相談や治療など障害をもつ親の悩みと向き合って個別指導する一方、子育て講演会や、豊かな言葉を身に付けることが子供の人間形成に大切との思いで絵本の読み聞かせ教室も開かれた。1年余りで地域の子供達の交流が芽生えて、本の読み聞かせ、クリスマスパーティ、ドイツからの留学生との交流(英会話)も定着した。また、ボール遊び、ソリ遊びなど戸外活動のほか、野菜作りや料理の体験もさせて子供達を楽しませる催しもされた。宇治子供文庫に15年間加入するとともに、ユネスコから本のプレゼントも受け、子供に本を貸し出す一方、夏休みや冬休みには、おはよう文庫を開いて子供達の集いの場として開放された。そして、子供達に手づくり本を作らせて発表会を開催され、これが子供達が達成感を味わう機会にもなった。このように地域の子供達と共に育ち合う、温かくて楽しい教室を26年間続けて来られた。ポラン一筋を振り返られて、『人間はね 自分以外の人の為、生き始めた時から、本当の人生が始まるんだよ』と千の風に乗って励ましてくれる夫はポランの外野でいつも応援！』のメッセージが大変印象的だった。

第104回おしゃべりサロン「私と 弦楽器づくり一筋～日本のミスター・ベースマン」で発表頂いた東澄雄氏は、世界遺産「五箇山合掌造り集落」で有名な富山県上平村の出身で、合掌造りの家は豪雪に耐える強固な造りで、生活と仕事の場を一つにした、生きる知恵が生んだ建築とされている。屋根の茅葺は「結」と呼ばれる村人の協同作業で葺き替えられるが、同氏も少年時代に大人に交じって手伝われた。夏は川で水泳、冬は段々畑で雪を踏んで俄かスキー場を作ってスキーを楽しまれ、畑や田んぼ等の家の手伝いも子供の生活の一部で、子供が家の手伝いをするのは当たり前だった。少年時代の思い、弦楽器づくりの夢を実現したいがため、五箇山の中学校卒業と同時にふるさとはるばる京都に来て茶木弦楽器研究所に就職され、楽器職人

として様々な苦勞を乗り越えられて楽器製作20年を経た時に社長の勧めで創業を決意された。現在、コントラバス(ベース)専門の楽器製作所は日本で唯三ヶ所。同氏が作られた弦楽器には風格と素晴らしい音色が出ると評されている。コントラバスを解剖した現物を展示頂き、コントラバスができる工程も説明して頂いた。コントラバスを奏でるとアルファ波が出て、女性の子宮内の血の流れと同じく「やすらぎの音」で幼児教育に良いそうです。2010年には宇治市技能功勞者賞を受賞されるとともに、社会貢献活動としてコントラバスを市内の音楽団体に寄贈された。60代後半の今も弦楽器作りに情熱を燃やしておられ、「プレーヤーのため自分のため生涯現役で楽器製作、若手製作者の育成、東日本の被災地の学校にコントラバス寄贈」などの抱負も語られた。ご自身の座右の銘「急がず休まず」通り、弦楽器作り一筋の人生を歩んで来られたことに共感するものを感じた

教育振興基本計画24ページに「宇治学の充実」(伝統・文化を学ぶ活動の充実)と記載されているが、この観点からも子どもたちに聴かせてやりたい、人材が宇治市におられる。

第43回おしゃべりサロン「私と てん茶づくり50年～850年の伝統の宇治茶を守り続けて」で発表頂いた寺川俊男氏。第47回おしゃべりサロン「私と 宇治の地理・歴史～歴史を知って真の郷土愛を」で発表頂いた岡本望氏。第56回おしゃべりサロン「私と 宇治田楽」で発表頂いた西田尚武氏。第92回おしゃべりサロン「私と 鶴匠の世界～宇治川の風物詩を演出する喜び」で発表頂いた澤木万理子氏。第108回おしゃべりサロン「私と 宇治茶の家業850年～宇治橋を渡る人々を癒してきた茶屋 “通圓”」で発表頂いた通圓亮太郎氏。

教育振興基本計画25ページに「環境教育の充実」に関しては、地球環境保護を身近なことから実践しておられる、第36回おしゃべりサロン「私と スローな旅～日本列島エコ徒歩縦断」で発表頂いた金澤良彦氏の話も有意義と思われる。

教育振興基本計画40ページに「大学・団体・企業などとの連携の拡大」「児童生徒の多様な体験機会の創出」と記載されているが、以下のような体験も有意義と思われる。

第103回おしゃべりサロン「私と 結の田活動からの学び」で発表頂いた佐原勤氏の結の田活動体験。

第104回おしゃべりサロン「私と 弦楽器づくり一筋～日本のミスター・ベースマン」で発表頂いた東澄雄氏の工房見学。

第122回おしゃべりサロン「私と 飛び出す絵本づくり～手のひらから季節が飛び出す妙味」で発表頂いた内田准氏の立体絵本の見聞。

最後に、生涯学習について、中央大学教授の広岡守穂氏が2年前の京都新聞の土曜評論で述べられた言葉は傾聴に値する。

「生涯学習は、知識教養を高めるタイプの学びにとどまってはならない。実践的な仕事や活動に
一歩踏み出すことをささえる学びでなければならない」

以上